

Green Community NewsLetter

省資源と環境負荷の低減を実現する
新エネルギー技術の動向を発信中！

低炭素型
まちづくり

森林保
全

太陽光
発電

小水力
発電

バイオマス
発電

風力
発電

グリーン
プロパティ

2015.05.01号

マルメのエコタウン

～新規開発地区と既存住宅地の再開発～

本メルマガでは、スウェーデンの環境先進都市マルメ市のエコタウンを2地区紹介する。

マルメ市は、スウェーデン3番目の都市で人口約28万人を有する。1990年頃までの主要産業は、地理的特徴を活かして、重工業、造船業、港湾の運輸業が盛んであった。しかしこれらの産業の衰退に伴い、失業率の上昇が社会問題となった。現在は積極的な産業構造の転換を図り、貿易、通信、サービス、金融、医療福祉を中心に国際的競争力を高め、オアスン地域での経済成長にも寄与している。



エネルギーを風力や太陽光、水力などの再生可能エネルギーで賄っており、各部屋で水やエネルギーの消費量を監視することができる。



ベストラハムネン地区



地区内の集合住宅



ターニングトルソ全景と入口



地区全体としては、家庭ゴミのバイオガス化やカーシェアリング、大規模な土壌の浄化処理が整備されていて、屋上緑化や鳥の巣箱の設置、水辺の空間の創造など、環境に加えて生物多様性の視点からのまちづくりにも積極的である。

◇ベストラハムネン地区

この地区は、2001年に開催されたヨーロッパ住宅博覧会のために、海沿いの造船所跡地に新規のエコシティを建設した地区である。コンセプトは、地域の再生可能エネルギーを100%にするといったものである。

マルメ市のシンボルにもなりつつある「ターニングトルソ」という2005年に完成した54階建てのマンションは、すべての



水と公園



緑と水

プロジェクト評価においては、土壌浄化、交通、エネルギー、緑地、雨水利用、リサイクル、教育などの観点から調査が行われている。



昔の風景（造船所）



歩行者用通路



海岸沿いの住宅

2015.05.01号

◇アウグステンボリ地区

この地区は、1948年頃からマルメ市の住宅公社が当事画期的であった地域熱暖房システムを導入して建設された住宅地である。1980年代に入ると建物自体の古さもあって人気は落ち始めた。1998年からエコシティプロジェクトが立ち上がり、当時住んでいた住民が参加する形でこの地区のエコシティ化が進んだのである。コンセプトの1つには、高齢者に優しいまちづくりも盛り込まれている。



アウグステンボリ地区

この地区で注目されているプロジェクトは、EUの助成金による屋上緑化で、9000m²を超える屋根の緑化が行われている。これにより、雨水の流出を最小限に抑え、省エネにつながる自然環境を地区内につくりだすとともに、生物多様性の面も含めた自然環境の保護に役立っている。地区内には、鳥の巣箱やゴミの分別容器が数多く設置されていた。

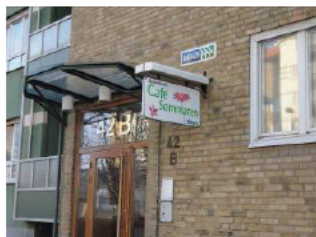
また、ボトムアップ型で地元の意見を吸い上げることから住宅とその周辺の再構築を成功させ、あわせてバリアフリー、趣味やカフェが楽しめる空間、大きなバスルーム、バルコニー、テラス、洗濯ルームなど高齢者に優しい地区づくりが行われている。



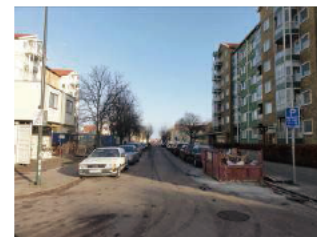
高齢者用施設



高齢者用施設の案内板



地区内のカフェ



地区内の様子

この地区は、エコタウンとして生まれ変わることができたが、スウェーデンには1970年代に建設された大量の住宅が今各地で問題となっているとのことである



鳥の巣箱



ゴミの分別容器

【コラム:レポーターが現地で聞いたこと】

①環境に対する意識

- ・自然と循環という2つのものを別々ではなく同じものとして教育する。
- ・市民の団体である自然保護団体(20万人、国民の約2%)がスーパーと組みエコマーク商品売り出した。消費者の厳しい目もあり、自然にエコ商品しか買わない市民が多くなったことから、市場が動いて各企業がエコに取り組むようになった。
- ・MAXというハンバーガーショップでは、メニューに商品別の生産CO₂排出量、いわゆるフードマイレージが記載されている。しかもこの会社は、他の2社の商品のフードマイレージを記載して、いかにMAX社が材料も含めた環境への取り組みを強化しているかをアピールしている。
- ・あるデータによると、年間1人あたりの肉消費量が日本は45kg、スウェーデンは78kg、アメリカは125kgだったそうだ。日本はものすごくCO₂排出量が少ない。こういった意味では日本は環境に貢献しているのではないかと。

②環境先進技術等

- ・太陽熱システムや屋上緑化も見られる。がしかし、全くエコという感じがしない。というより、見えないところでエコの仕組みを取り入れて、我慢するとか、何かを抑制するといったことをするのはなく、むしろ最先端のまちといったものを創造しているといった感じだ。

本資料は、弊社レポーターが現地をストックホルム市在住のレーナ・リンダル氏に案内していただいた内容をもとに作成したものである(視察:2010年11月)。